

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 吉富 朝子

学位申請者 Vivian Turk（ビビアン・テルク）

論文名 Schooling of Refugee Youth and its Effect on their Identity

【審査結果】

吉富朝子を主査とし、主任指導教員の伊勢崎賢治、および副査として黒木英充、福田彩（外部委員）、宮城徹（外部委員）から成る審査委員会は、2022年12月14日に上記論文ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、世界的課題の一つである難民問題の、特に子どもたちのアイデンティティ形成について、まず先行研究を網羅的に検証し、受入国における学校教育が与える影響とは何か、そして彼らはそれを経験としてどう感受しているかを研究設問に据え、定性的調査手法を用いてそれらを実証したものである。難民の社会統合を前提とする受入国では、教育効果として、より安全な環境が提供され、新たな人生設計の機会が与えられる実益性の反面、子どもたちのアイデンティティ形成への配慮の欠如が、受入国社会への同化や排他主義への忍耐を強いる、という人間としての尊厳に関わる瑕疵性が明確に存在することを示した。

第一章では、上記の研究設問を検証するにあたり、EU圏において最大の難民受入国であるドイツに着目し、その中でもシリア難民に焦点をあてる背景を論じている。申請者自身がシリア人である調査実施面での利便性はあるが、2022年2月に勃発したウクライナ戦争以前の国際情勢においてシリアは、世界最大の難民産出国である。

第二章では、受入国における学校教育が難民の子どもたちに与える影響の問題について先行研究文献をくまなく調査し、システマティック・レビュー（系統的レビュー）という手法を用いてデータの偏りを限りなく除く分析を試みた。その結果、以下の知見が明らかとなった。①若年時代に強制的な移住に関連する原因で培ったトラウマは成人期にまで長期に影響を及ぼし、うつ病や攻撃性の原因となる。②トラウマや脅迫概念は、若年層難民のアイデンティティ形成において重大なリスク要因となる。③教育面での支援は、難民の子どもたちのホスト社会への受け入れ体制の根幹となる。④若年期にグループとしてのア

アイデンティティへの社会差別を経験認知することは、時にグループへの帰属意識が自我の崩壊を防ぐバッファの機能となるため、健全な青年期への心理的成長に影響を及ぼす。

第三章では、受入政策において混同されがちな移民と難民の問題について焦点をあてている。前章のシステマティック・レビューでも認識された若年層の異文化社会への統合への先行研究の動向として、その対象は移民に偏り、一般論としてより多くのトラウマや心理的苦痛を経て受入国に到着する難民に特化した分析の希薄さが指摘された。更に、一般論としての若年期から青年期にいたる子供のアイデンティティ形成に関わる限定的な要素の中から「境界性(liminality)」「規範性(sovereignty)」「言語(language)」が受入国社会への統合に密接に影響し合うかを、前章のシステマティック・レビューを補完する先行研究調査で明らかにしている。

第四章では、難民問題の歴史的そして世界情勢的な背景を詳述している。まず、母国を脱出し受入国に到達するまでの、シリアを中心に据えた難民の経路とその経験のプロフィールを提示している。本研究で採用された事例はドイツに在住するシリア難民であるため、この章では、ドイツ社会で歴史的に使用され定着しているカテゴリーとしての「亡命者(asylum)」の特殊性に焦点を当てて、ドイツの難民の状況を詳述し、ドイツにおいて歴史的に運用されてきた移民への統合政策が、どのように難民に適応され、若年層難民に学校教育へのアクセスを供与してきたかを検証している。

第五章では、本研究で行う本調査に先立ち実施したパイロット調査の全容を記述している。パイロット調査では、ドイツにおける学校教育での経験を共有することに同意した2名の難民の子どもたちに対してインタビューを行った。受入先となった地方行政が難民に対処する体制を十分に整えていなかったため入学が遅れ、さらに難民としての法的地位に対して当人たちが差別と捉えている経験を経た若者たちである。パンデミック期での対応としてインタビューはオンラインで実施された。このパイロット調査は、対面に比べインタビューの深度で劣ると予想される弱点を克服するための措置であった。またパイロット調査の結果、質問の具体的な言葉の言い回しの修正を行い、本調査に臨むために得られた知見を詳述している。

第六章では、本研究の本調査の概要が語られている。本調査は、4人という限定的な対象に、徹底した質的調査を試みた。第一部では、アイデンティティ形成分析に不可欠なインタビュー対象者各々の生い立ち、特に受入国到着前後の個人史を紹介している。4人全員がドイツで学校教育の初期段階を経たシリア人であるが、そのうちの一人はパレスチナ出身である。第二部では、前章の先行研究で得られた知見を鑑み、インタビューから読み取れる個々の対象者が語る経験とその認識のコード化(coding)を行った。そして、その項目をテーマ・サブテーマという二層に体系化し、項目ごとに各対象者のアイデンティティ形成がどのようなメカニズムでなされたかを詳細に議論している。それらのメカニズムとして、帰属する文化の切り替え(cultural frame switching)、一体化するグループの変換(shifting)

group identification)、難民という地位のアイデンティティ化およびラベル化、そして他者との関係において境界性(liminality)の設置を駆使しながら、難民の子どもたちが経験するアイデンティティ形成の過程をモデルとして提示している。

第七章では、本研究で得られた様々な知見を冒頭の研究設問への回答として要約している。前章で提示されたモデルは、学校教育において様々な問題に対峙する難民の子どもたちのアイデンティティ形成がたどる道筋を説明するものであり、この章では、それを踏まえて、難民の子どもたちのためのインクルーシブ教育の解決策として「難民のための尊厳ある教育」を提案している。最後に、本研究の限界の分析と共に、今後の研究への提言をもって本論文の結論とした。

【審査の概要及び評価】

審査では、テルク氏によるパワーポイントを用いた博士論文の概要の発表の後、各審査委員から、まず本論文を評価できる点として、以下のことが述べられた。

1. 発表者の論文は、論文の構成、難民と移民、心理的・社会文化的・ポスト構造的アイデンティティ、子どものアイデンティティ発展などの基本概念を含む徹底した文献レビュー、研究の背景、方法論、研究結果、考察、結論が明確に提示している。この論文における主な問いは、学校教育（カリキュラム、教師、教育政策）が難民の子どもたちのアイデンティティ構築に与える影響を検討することであった。この問いに関して、インタビューに基づき新しい知見として分類されたテーマから、以下の2点は、子どものアイデンティティ構築に影響を与える可能性のある文献にて、すでに議論されているものと比較して、特に興味深い。
 - 「学校教育がもたらす短期的な効果の認識(perceived short-term effects of schooling)」において、母語を忘れることもその一つであるという点。
 - 「自己同一性(self-identification)」において、学校現場で自分が他者からどのように認識されているかという自己同一性の調整があるという発見。他者に混乱を与えないよう、パレスチナ人ではあるが「私はシリアから来ました」と自己紹介する事例に代表される。
2. 包括的なインタビューから得られた知見は、学校教育が難民の子どもたちのアイデンティティ構築に与える影響にとどまらず、彼ら彼女ら自身と周囲の環境が相関する以下のような幅広い現象を見出している。
 - 社会的側面として「他者性というレッテルを貼られた難民とその尊厳(otherness that label refugee and dignity)」において、メディアで取り扱われる難民に対するイメージは偏っており、難民自身が実際に現地社会で生活する上で有害にもなり得ること。

- 教室内での友人との関係の側面として「仲間との関係(relationship with peers)」において、現地同級生とのトラブルが見られるが、それはある程度想定されていた現地同級生だけに限らず、他の国籍の移民の同級生との間にも起こり得るということ。

このように、テルク氏の博士論文が高く評価できるものであると確認された上で、質疑応答では以下のような審査委員からの指摘とテルク氏からの回答がなされた。

1. 方法論について、データを収集したのがパンデミック期でなかったら、データ収集を含めてどのように研究を進めたかの問いに対して、実際にドイツに行き、難民の子供のいる教室の授業に出席し、難民の子供と教員や級友との関わりなどのダイナミクスを観察することをしたかった旨の回答があった。
2. 第7章の提言について、今後の課題として、行政、カリキュラム・授業、教員研修の3つを挙げている。カリキュラム・授業については、「インクルージョンを促進し、難民の生徒が自分らしくいられるようなカリキュラムや教材を開発し、見直すこと」という記述がある。受入国の教育政策立案者への提案として、教室での具体的な介入プランを一步踏み込んで提言してほしいという要望が寄せられた。これに対して、受入国と難民出身国のカリキュラムを並行して両方実施することは一つの案であり、ヨルダンやトルコの国境周辺でシリア難民の人口が密集している地域での実例が挙げられた。現地の学校の放課後にシリアのカリキュラムで授業をしている予備学校に通う形式である。ただ、これらの取り組みは受入国政府の主導ではなく、UNICEFなどの国連機関主導である。シリアの隣接受入国ではないドイツなどでは実現は困難だろうが、少なくとも文化的・言語的に寛容な教室の雰囲気づくりは必須であり、最終的には教員個人の資質とその養成に関わる問題である。
3. そもそも、この研究において「アイデンティティ」の定義とは何か、という根源的な質問が呈された。テルク氏は、本研究においてはアイデンティティそのものの一定の語彙の定義には囚われず、そして敢えて再定義もせず、各々の難民の子どもたちが、学校教育での経験を通じて自分自身でそれをどのように認識し、それを記録するかに徹した。インタビューにおいても、「あなたのアイデンティティとは何か」のような聞き方を避け、個人史として内面性の自由な発露に心を砕いた。
4. 博士論文レベルの研究調査でデータ収集の対象が4名というのは少なすぎるのではないかという本研究の特質の根幹にかかわる質問に対して、事例の数が少ないほどインタビュー参加者の内面で起きた事象に迫ることができる。その手法の確立のために、特に心理学面での徹底した先行研究と、その知見

に基づいたインタビュー手法を作成し、更にパイロット調査でそれをテストし、その効果を確認しながら本調査に臨んだ。本調査では、4名の個人史に、多くの事例を扱う調査では不可能である深度で肉薄することができた。

5. 少数の事例を深く調査することによって定性的調査ならではの探求ができると主張しているいっぽうで、調査対象者ひとりひとりの個人史の記述が不十分で、コード化の結果得られたテーマ・サブテーマに基づく横断的な記述分析が中心となっていた。また結論のまとめ方も定量的研究であるかのような一般化を追求していると思われる箇所があったがこれはなぜか、という質問に対して、当初パンデミック期以前には定量的・定性的アプローチを併せた *mixed method* をとる研究構想であったため、その影響が出てしまった。今後の研究ではそこを補っていきたい。また、今回扱いが不十分だった文化・宗教・言語の観点に関してもより深く追求していきたいと思っている。

このようにテルク氏は、質問や指摘に対して的確に応答するとともに、自らの研究の限界を認識し、その改善方法についても十分に理解していることがうかがえる質疑応答の内容であった。

以上の論文評価及び最終試験での質疑応答の内容から、本論文は若年層難民が学校教育において抱える諸問題に関する研究の理論面そして実践面の双方に大いに貢献する秀逸な論考であり、学位申請者が優れた研究者としての資質を十分に有していると判断された。よって審査委員会は、全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。